スリジー=ラ=サル・シンポジウム報告

レヴィナスとメルロ=ポンティ——身体と世界——

渡名喜庸哲　TONAKI Yotetsu
三宅萌 MIYAKE Moe

はじめに　スリジー=ラ=サルとは

フランス北西部、ノルマンディー地方の村スリジー=ラ=サルに位置するスリジー国際文化研究センター（Centre Culturel International de Cerisy）は、フランスの人文学研究における滞在型シンポジウム会場としてその名を轟かせてきた。研究史上も名だたるシンポジウムをいくつも開催してきたこのセンターは、20世紀初頭に研究者・批評家ポール・デジャルダンの創始した「ポンティニーの旬日会（Décades de Pontigny）」という談話会に由来する。この会は当初はブルゴーニュ地方のポンティニーで開催され、雑誌『新フランス評論（*La Nouvelle Revue Française*）』の作家たちを中心とする参加者が、政治や社会、宗教といった様々な問題について活発で自由な議論をおこなう場だった[1]。その後、ゲシュタポによる資料の押収や創始者デジャルダンの逝去といった難局を経るも、第二次世界大戦中には亡命研究者たちによってまずはアメリカで、次いで戦後はパリ北部のロワイヨモン修道院において談話会は自助的に継続されてきた。そして1952年以降はポールの娘、アンヌ・ウルゴン=デジャルダンによって、周りを田園に囲まれたノルマンディー地方のスリジー=ラ=サルの古城に場所を移し、学際的な国際会議場として継承される。

スリジーでは、もともとは哲学、文学、教育、政治といった人文社会系の、また1980年代以降には自然科学についてのテーマも含む学際的なシンポジウムが開催されてきた。聴衆も研究者や芸術家、作家、教員、学生といった様々な世代、所属の人々が迎えられ、国籍や文化を超えた親密で活気のある対話の機会が提供されている。

とりわけ、ハイデガー、デリダ、レヴィナスをはじめ20世紀を代表する哲学者本人を招待した大型のシンポジウムが著名である。1958年以降はシンポジウムの成果が論文集として刊行されている。

1. シンポジウム「レヴィナスとメルロ＝ポンティ――身体と世界」の概要

この度のスリジー＝ラ＝サルでのシンポジウム「レヴィナスとメルロ＝ポンティ――身体と世界（Levinas et Merleau-Ponty: le corps et le monde）」は、2022年7月6日から7月12日までの計7日間に渡り開催された。運営責任者はコリーヌ・ペリュションと渡名喜庸哲であり、両者がそれぞれ所属するギュスタヴ・エッフェル大学／パリ東大学付属のハンナ・アーレント学際的政治学研究所（LIPHA）および立教大学文学部の共催のもと、日本とフランスの両国の研究者を主な参加者とする日仏共同開催型の国際シンポジウムとして開催された。

主題となるモーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）とエマニュエル・レヴィナス（1906-1995）は、フッサールおよびハイデガーの現象学の遺産を引き継ぎ、一方は「身体」や「世界」の存在論的構造を、他方は「他者」との関係の「倫理」を復権させることによってその後の哲学および倫理学研究に大きな影響を与えたフランスの哲学者である。スリジー＝ラ＝サルでは、レヴィナスをめぐるシンポジウムは1986年に一度開催されているが[2]、メルロ＝ポンティについては初めての試みである。

会場となるスリジー国際文化研究センターの近郊には国立フランス現代出版資料研究所（IMEC）という、現代フランスの思想家・作家の遺稿を管理する国立文書館がある。そこにはレヴィナスの遺稿のほか、ジャック・デリダやアンドレ・ゴルツといった本シンポジウムにも関連する思想家の遺稿も収められているため、シンポジウム3日目午後にはIMECを会場にして、幅広くフランス現代思想を視野に入れた討議・座談会が行われた。

2020年から続くコロナ禍の影響もあったものの、オンライン参加・ビデオ録画での発表は日本からの発表者2名のみだった。シンポジウム初日にはフランス国鉄の大規模ストライキがあり、参加者

のほとんどがあてにしていたノルマンディー地方行きの列車が大幅にキャンセルとなり、急遽代替手段を探す必要に迫られたほか、ロシア－ウクライナ間の情勢不安、また安倍元首相の銃撃事件など、国内外で不安定な状況下にあった。そうしたなかでも、立地的にはほとんどの周囲から隔離されているようなこの古城において、発表およびその後の質疑はもとより、伝統的なフランス料理と名産のシードルが並ぶ食堂で参加者同士でコンヴィヴィアル（共生的）と呼ぶにふさわしい食事を共にすることで、日欧の研究者をはじめとする様々な国籍・世代・所属の参加者間の強い知的ネットワークが形成されることになった。

2. 各セクションについて

シンポジウムは、7月6日から12日までの計7日間行なわれた。

初日の7月6日は夕刻を目処に随時参集し、センターの施設等の紹介および夕食をとった後、屋根裏のコモンスペースにて参加者の自己紹介を行った。

2日目の7月7日は、会場となる図書室にて、まず運営責任者であるコリーヌ・ペリュションと渡名喜庸哲の二人からシンポジウムの全体的紹介が行われた。本シンポジウムの意図は、両者の鍵概念である「身体」や「世界」、「他者」といったテーマを主軸に据えた上で、従来から重視されてきた「言語」や「政治」ばかりでなく、近年の新たな研究動向としての「エコロジー」、「ケア」、「傷つきやすさ」、「経済」、さらに動物やロボットを含む「非人間」との関係をも盛り込んだ、新たな読み方を提示することにある。この作業を、フランス（および近隣諸国）と日本において、メルロ＝ポンティおよびレヴィナス哲学の研究に携わる論者が一堂に会することにより、日本思想との関連を含めて多角的に論じるという本シンポジウム全体の目的が確認された。

第1セクション：「感性的世界の目覚め」（7月7日）

上記のテーマ別に、各日それぞれ1～2のセッションが設けられ

た。

7月7日のセッションは「感性的世界の目覚め」と称され、メルロ＝ポンティおよびレヴィナスの現象学思想の意義が主題となった。

まず、ラドバウド大学（オランダ）准教授のアナベル・デュフルク（Annabelle DUFOURCQ）氏の発表「現象学の空想的諸身体（Les corps fantastiques de la phénoménologie）」がなされた。発表の中心問題は、「主体」とその「受肉」、そして「想像的なもの」の三項関係にある。氏は全ての現象学が「知覚」と「現在（présence）」の優位性に基づいているという発想に異議を唱えた上で、むしろ現象学とは現在の不透明性や肉（chair）、相対性を犠牲にすることなしに、観念と感覚的なものとの全体像を得ようとする哲学として定義する。現象学には当初から空想的で権利上複数的な受肉というテーマが存在していたという。それゆえ、「この身体」と「想像的な身体（幽霊、神話、世界の肉、現実とその影……）」とがフッサール現象学の鍵としてどのように展開されたかを検討した上で、現象学がいかに空想化（fantasmer）してきたかが示された。

午後は、早稲田大学准教授の長坂真澄氏が、発表「レヴィナスと経験概念の変容（Levinas et sa transformation du concept de l'expérience）」（録画映像による参加）を行った。デリダは、『ハイデガー――存在の問いと歴史』講義（1964-1965）で、ヘーゲル、ハイデガー、レヴィナスにおける「経験」概念の変容を提示する。長坂氏はこの変容の背景を明らかにした上で、ハイデガーによる「ヘーゲルとその経験概念」を参照しながら、デリダの講義において何が問題化されているのかを問う。デリダはレヴィナス的な「経験」概念を、決して現在とならない「過去」の概念と結びつけることで、ヘーゲルやハイデガーの「経験」概念の彼方へと位置づける可能性を示唆しているという。それゆえ、どのような意味でレヴィナスが「現前」の形而上学の脱構築者として位置づけられ、いかにしてこの脱構築が新しい「経験」概念を切り拓くのかを理解することが重要となる。

続いて、京都大学教授の杉村靖彦氏による発表「存在者の手前に降りること――レヴィナスと西田の交錯（Descente en deçà de l'être: Levinas et Nishida entrecroisés）」がなされた。杉村氏は、フランス現代思想と京都学派の哲学という二重の知的源泉を踏まえ、ポストモダンの時代における宗教哲学の可能性を構想する。ハイデガー的な意

味で「存在者（l'être）」を理解するのであれば、レヴィナスの思想の大きな方向性とは「存在者の彼方へ」という定型句によって特徴づけられる。しかしこの思想は同時に、「存在者の手前」に降りていく道を切り拓いたことも忘れてはならない。その最も際立った証は、レヴィナスがあらゆるものを「ある（il y a）」という事実へと還元したことに見出される。他方で、西田幾多郎や田辺元といった京都学派の哲学者たちのアプローチは、彼らが「絶対無」と呼ぶものによって存在者を克服することにある。それゆえ京都学派の哲学は、一見するとレヴィナス的な絶対的かつ質料的な地（fond）への降下の思想とは対立するように見受けられる。しかし、杉村氏によれば「絶対無」の哲学とはプラトン主義的なコーラを特異な仕方で読み直すことによって練り上げられたものであり、「原初的に質料的なもの（l'hylétique）」というテーマへの理論的貢献が期待される。杉村氏の発表は、フランス現象学と西田に見られる日本思想の比較ということで、フロアからも両者の関係を問う活発な質問があった。

第2セクション：「地球への居住」（7月8日）

7月8日は、まず午前に「地球への居住」と題し、メルロ＝ポンティおよびレヴィナス思想を「環境」や「居住」の観点から読み直すセクションが設けられた。

まずコリーヌ・ペリュション氏による発表「レヴィナスの〈地球〉への居住から、メルロ＝ポンティの肉の存在論へ――環境現象学的諸観点（De l'habilitation de la Terre de Levinas à l'ontologie de la chair de Merleau-Ponty: perspectives écophénoménologiques）」では、レヴィナスの身体性の現象学、そしてメルロ＝ポンティの肉の存在論が切り拓いた環境現象学の成果が評価され、「糧（nourritures）」という観点から環境人文学を更新することが目指された。レヴィナスとメルロ＝ポンティの間には感性的世界に没入する際の現象学的記述に違いが存するものの、共にエコロジーの観点から非常に豊かな展望を提示する。というのも、人間を他の生物から根本的に分離し考える傾向にある「自由」哲学特有の自然／文化の二元論を越えて、生きることそれ自体を可能にする根源的次元としての「地球への居住」の問題を考えているからである。このようにペリュション氏は、邦訳も

ある『糧』での議論に基づきつつ、そこで示された環境現象学の思想の射程をメルロ＝ポンティにまで広げることでその意義を論じた。

続いて、立教大学教授の河野哲也氏による発表「身体－気候－世界――メルロ＝ポンティにおける半透明と転回（Le “corps-météo-monde”: le translucide et le tournant chez Merleau-Ponty）」が行われた。氏によれば、メルロ＝ポンティ哲学の究極の目的とは、我々の世界へのアクセスを制限する「知覚の扉」を開き、何ものも欲望することなしにこの世界に生きることであるという。そうであるならば、世界とは記憶や歴史を持たない永遠の再出発の世界ということになろう。そこでは何一つ繰り返されることはなく、「目的」も「意味」も未だ生まれていない。河野氏は、メルロ＝ポンティ哲学を、永遠の再出発の世界の認識と祝福をなすものとして評価した上で、それを身体と世界の流動的関係という観点から論じ直した。

IMEC会場

7月8日午後はカーン市近郊アルデンヌのIMECに訪問し、博物館や図書館を見学した。その後、「翻訳と諸翻訳（La traduction et les traductions）」というテーマのもと、レヴィナスやデリダの翻訳を手掛けてきた渡名喜、更にデリダの英語圏への翻訳・紹介を牽引してきたペギー・カミュフ（Peggy KAMUF）氏、マイケル・ナース（Michael NAAS）氏、パスカル＝アンヌ・ブロー（Pascale-Anne BRAULT）氏の四者によるセッションが設けられた。カミュフ氏、ナース氏、ブロー氏はデリダの講義録の編者としても知られているが、IMECにて新たな講義録の調査を定期的に行なっている。渡名喜もIMECに草稿が収められたレヴィナスの著作集の邦訳に携わっており、そうした経験をもとに哲学者のテキストの翻訳という鋭意を主題に鼎談がなされた。また、シンポジウム参加者には翻訳経験の豊富な参加者が多かったことから、レヴィナスの翻訳で知られる合田正人氏や藤岡俊博氏ら聴衆へも発言が促され、参加者の翻訳経験や向き合い方についての多様な意見交換がなされた。

次いで、立教大学教授の澤田直氏による発表「エコロジーと実存――アンドレ・ゴルツにおける現象学的遺産（L’écologie et l’existence: l’héritage phénoménologique chez André Gorz）」がなされた。サルトル

現象学の影響を受けつつ、エコロジー思想を展開したアンドレ・ゴルツの思想は、本シンポジウム全体の主題であるメルロ＝ポンティやレヴィナスからエコロジーへと視座を広げるためにも重要な参照先となる。澤田氏によれば、環境破壊を懸念する環境思想家の多くが人間中心主義を批判するのに対し、アンドレ・ゴルツは、エコロジーをヒューマニズムと単に対立させるのではなく、むしろ人々の生や労働の様態と結びついた人間の解放だとみなし、ヒューマニズムを呼びかけさえする。サルトル実存主義に根ざしているゴルツのエコロジー思想では、主体の問題が倫理学の問題と不可分なのである。澤田氏はフッサールやメルロ＝ポンティの影響も加味しながら、ゴルツのエコロジーの思想における現象学的・実存主義的遺産を強調した。

立食形式のビュッフェの後、「地球への居住の哲学」のテーマについて、IMEC研究員を務めるフランソワ・ボルド（François BORDES）氏の司会のもと、立教大学の河野哲也氏、ペリュション氏の三者によって、一般公衆にも開かれた討議が行われた。我々を脅かす様々な危機を前に、いかにして「地球に住む」ことができるのか。ペリュション氏は、民主的でエコロジカルな社会について考えるため、人間の「傷つきやすさ」を認識するとともに、他者性に開かれ、繊細さと結びついた合理主義を想像することの重要性を強調した。このセッションでとりわけ強く聴衆の関心を惹いたのは、河野氏が日本で推進する「子供のための哲学対話」の試みである。河野氏は幼稚園児や小学生を含む子ども向けの哲学対話の実践経験をもとに対話を通じた「考え、議論する道徳」の意義を述べた。今後の道徳教育においては、子どもたちはもとより教師もまた、自ら伝統的な価値観を批判的に検討し直し、状況に応じてどのような道徳的な判断をおこなう能力を育む必要がある。そうした対話の試みこそが、「地球への居住の哲学」という課題にも不可欠であることが主張された。

第3セクション：「身体性、ケア、傷つきやすさ」（7月9日）

7月９日のテーマは、近年の現象学研究において注目を集めている「身体性、ケア、傷つきやすさ」であった。

まず、大阪大学教授の村上靖彦氏による発表「レヴィナスと欠点なき世界――貧困地域の子どもたちの支援（Levinas et le monde sans failles: le soutien aux enfants des quartiers pauvres）」がオンライン発表にて行われた。村上氏は大阪府の西成といった貧困地区での子どもたちの支援を行っている。そこでの経験やインタビューをもとに、一人称の語りに内在的に、言い換えれば質的に分析し、レヴィナス現象学と対照させた。質疑では、子どもの声、特に「SOS」のサインをいかにして大人が聴取できるかに関心が集まった。村上氏からは、最も重要なことは子どもの欲望や願望を起点にし、それに寄り添うことであると応答した。

続いて、東北大学准教授の澤田哲生氏による発表「視覚の狂気――メルロ＝ポンティの現象学的思考におけるナルシシズムの問題（Folie de la vision: la question du narcissisme dans la pensée phénoménologique de Merleau-Ponty）」が行われた。澤田氏によればメルロ＝ポンティ現象学の特異性は、『ソルボンヌ講義』及び『見えるものと見えないもの』において、「身体」概念の現象学的構成にフロイト的な（そしてピアジェ的でもある）「ナルシシズム」概念を導入したことにある。ここから、一般的な意味での現象学から逸脱した「ナルシシズム」概念にメルロ＝ポンティがどの程度、またどのような理由から言及しているのかという疑問が生じる。発表ではメルロ＝ポンティの「ナルシシズム」へのアプローチを検討した上で、『見えるものと見えないもの』における「私の肉」のナルシス的な側面が指摘された。

午後は、パリ高等師範学校のフランス国立科学研究センター（CNRS）の研究ディレクターを務め、メルロ＝ポンティの包括的な草稿研究で著名なエマニュエル・ド・サントベール（Emmanuel de SAINT-AUBERT）氏による発表「メルロ＝ポンティにおけるポルタンス（La portance chez Merleau-Ponty）」がなされた。メルロ＝ポンティは人間を「身体のもう一つの様式（manière）」として特徴づける。サントベール氏によれば、身体の様式としてのスタイル（style）が我々の肉を構成するのであり、そのスタイルとは「関係」と「開け」によって特徴づけられる。世界と他者への関係は、メルロ＝ポンティが「存在」と呼ぶ多型的な不確定性への開けを可能にする。こうした観点からは、存在は、世界でも肉でもなく、実在と共存とを「運

ぶ（porte）」ものであると理解されるという見解が示された。

次に、高等師範学校及びフッサール文庫に所属する哲学研究者で精神分析家のドロテ・ルグラン（Dorothée LEGRAND）氏による発表「レヴィナスとメルロ＝ポンティの語る身体――精神分析読解（Les corps parlants de Levinas et Merleau-Ponty――lecture psychanalytique）」が行われた。言語学者がランガージュ、ラング、パロールの区別を詳述する一方で、メルロ＝ポンティは語る言葉（parole parlant）を語られた言葉（parole parlée）より優先し、レヴィナスは〈語ること（le Dire）〉の〈語られたこと（le Dit）〉に対する還元不可能性を主張した。そこでは話者の自分自身と世界との関係だけでなく、他者との関係が、それゆえ倫理が賭けられている。ルグラン氏はこうした倫理的関係を時間的観点から考察する。言い換えれば、語ることに関して、どの（来るべき）歴史に従い、どの（来るべき）歴史において主体であるか、どんな（来るべき）歴史に応答し、どんな（来るべき）歴史の責任を担うのかという問いかけが問題になると述べた。

最後には、パリ西大学教授のフランソワ＝ダヴィド・セバー（François-David SEBBAH）氏による発表「レヴィナスとバトラー（Levinas et Butler）」がなされた。ジュディス・バトラーはさまざまなかたちでレヴィナスについての批判的な読解を行なっているが、セバー氏がとりわけ注目したのは、『戦争の枠組み』において「不安定な生」という概念をもとになされるレヴィナス批判である。バトラーは、レヴィナスは「顔」の呼びかけや曝された裸性という契機を重視するものの、他方で、その対面関係の思想は、倫理的関係に先立ついっそう根源的な「不安定な生」の次元を看過するものと批判した。セバー氏はこうしたバトラーの批判の意義は認めつつ、それはレヴィナスの思想（とくに「存在の彼方」という次元）を正当に評価するものではないとし、両者の対話をいっそう展開させる展望を示した。

同日の夜は、社会科学高等研究院（EHESS）のディレクターを務めた地理学者・東洋学者のオーギュスタン・ベルク（Augustin BERQUE）氏による「メルロ＝ポンティと今西における自然について（De la nature chez Merleau-Ponty et chez Imanishi）」をめぐるセッションが開かれた。ベルク氏は対面参加の予定であったが、シンポジウム直前に体調を壊し、欠席となった。発表予定であった原稿をコリー

ヌ・ペリュション氏が代読した。ベルク氏によれば、メルロ＝ポンティと、日本の生態学者の今西錦司（1902-1992）は、ユクスキュルにおける環世界論（Umweltlehre）や和辻哲郎における風土学につらなる、メゾロジー（mésologie）を意識した自然に対するアプローチを共有している一方で、両者ともそれを自らの自然概念として主張することはない。メルロ＝ポンティは1957-1958年『〈自然〉講義』の一部をユクスキュルのテーゼに割いているが、今西は主要著作においてユクスキュルにも和辻にも触れることはなかった。だが、今西の中心概念である「棲み分け」は、ユクスキュルの「反対構成（Gegengefüge）」や和辻の「風土性」に大きく関わっている。このようにベルク氏は、メルロ＝ポンティ、今西、ユクスキュル、和辻の四者の理論がメゾロジーの原則にどの程度まで対応しているかを検討した。

第4セクション：「経済と政治」（7月10日）

7月10日午前は、「経済と政治」とが主題となった。

まず、東京大学准教授の藤岡俊博氏は、「レヴィナスと経済思想（Levinas et la pensée économique）」と題された発表で、レヴィナスがいわゆる「経済思想」とどのように関連するかを検討した。レヴィナスは、（重要な例外としてのマルクスを除き）経済学者について殆ど言及していない。しかしレヴィナスの思想には、厳密な意味での経済学に位置づけられ得る要素が多く含まれている。例えば「自我と全体性」（1954）の中で、貨幣の重要性とそれが可能にする「経済的正義（justice économique）」を強調する。この視点は1980年代まで維持されるが、定量化と比較に基づく正義が、他者への責任という倫理と対照的であることに藤岡氏は注目する。発表ではレヴィナスの「経済思想」を、社会経済学者（マルクス、モース、シミアンド）との対話の可能性を構築しながら把握することが試みられた。

続いて、最近カーン大学にてメルロ＝ポンティに関する博士論文を提出したばかりの若手研究者のクレール・ドドマン（Claire DODEMAN）氏による発表「メルロ＝ポンティを用い政治的参加を思考する（Penser l'engagement politique avec Merleau-Ponty）」がなされた。メルロ＝ポンティの政治思想については、かねてより広く注目され

てきたが、ドドマン氏によれば、メルロ＝ポンティの思想から政治的参加（engagement）の問題を考えるにあたっては、彼の政治的テクストと現象学の議論とを対峙させる必要がある。そもそも、人間の行動の根拠としての身体的次元がなければ参加は存在しえない。そして、参加とは実存を構造化するものであり、その哲学的基盤によってこそ歴史的行為における特定の参加をも理解することが可能となると述べられた。

最後に、パリを拠点とするレヴィナス研究所が刊行する『レヴィナス研究』誌の編集長でありレヴィナス研究者のジル・アニュス（Gilles HANUS）氏による発表「レヴィナスにおける政治の非現実性（L'inactualité du politique chez Levinas）」がなされた。他者との倫理的関係を根源的だとするレヴィナスにおいて、もちろん政治の問題や同時代のさまざまな出来事に対する関心が不在であるわけではないが、「政治は後で」という表題のテクストが示すように、政治的関係は二次的な地位を与えられてきた。アニュス氏は、こうしたレヴィナスの倫理と政治の関係を振り返ることで、その思想における政治の位置づけを二次的・副次的なものとみなすより、むしろその「非現実性」を肯定的に評価すべきではないかとの視点を示した。

第5セクション：「人間と人間とは他なるものたち」（7月10日）

7月10日午後は「人間と人間とは他なるものたち」というテーマで、動物性やロボットといった非人間の問題を取り上げた。

渡名喜の発表「レヴィナスにおける「人間と非－人間の微細な差異」をめぐって（De l'"infime différence entre l'homme et le non-homme" chez Levinas）」では、「他者へのヒューマニズム」を説くレヴィナスの「倫理」思想において、どのように「人間以外（autres qu'humains）」にアプローチするかが取り上げられた。近年、動物には「顔」があるのか、人間との理性的対話が成立しうるロボットはどうかといった問いがレヴィナス思想に提起されている。これらの問題について検討するために、渡名喜はレヴィナスの主著『全体性と無限』における「人間と非－人間との間の微細な差異」という表現に注目した。とりわけ『全体性と無限』という大著で展開する「糧」をめぐる議論から「顔」をめぐる議論への移行は、なんらかの弁証法的展開と

して読まれるものではなく、その両者の「微細な差異」を押しはかろうとする努力を伴っているとさえ言える。こうした角度から、渡名喜の発表では、「非人間」という主題をレヴィナス思想において検討するための理論的な前提が確認された。

次いで、イタリアのローマ・サビエンツァ大学准教授オリエッタ・オンブロージ（Orietta OMBROSI）氏による発表「レヴィナスの「動物」との直面、及びデリダの批判（Le face-à-face de Levinas avec l'"animal" et la critique de Derrida）」では、デリダの『動物を追う、ゆえに私は〈動物で〉ある』におけるレヴィナス批判を受けて、「動物の顔」という問いがレヴィナスにおいてどのように論じられるかが検討された。デリダは、他性の哲学者において動物の問いが検討されていないことを「謎」であるとし、「蛇には顔があるのか」と問うた。オンブロージ氏は、デリダの批判の妥当性を認めつつ、デリダの問いに対しては、レヴィナスにおいてはまさしく蛇という形象がむしろ中心的な問題となりうるというかたちでの返答が可能であることを示した。

第6セクション：「言語、真理、美学」（7月11日）

7月11日午前は、事前にオンライン発表を予定していたソルボンヌ大学教授のダニエル・コーエン＝レヴィナス氏が技術トラブルによって発表ができなくなったため、カーン大学の大学院生アレクシス・カドレ（Alexis CADORET）氏による個人研究発表が行われた。

同日午後は明治大学教授の合田正人氏による発表「地球、水の上、難破した方舟――プルーストを読むメルロ＝ポンティとレヴィナス（Terre, Au-dessus des eaux, Arche naufragée… Merleau-Ponty et Levinas lecteurs de Proust）」が行われた。レヴィナスは『存在するとは別の仕方で、あるいは存在することの彼方で』（1974）において四度メルロ＝ポンティに言及する。これらの言及の全てがメルロ＝ポンティの「根源的歴史性」概念についてであり、レヴィナス対メルロ＝ポンティという問題設定はこの点に集中化させることができる。「根源的歴史性」とは、メルロ＝ポンティによるフッサール論「哲学者とその影」によれば「〈大地（Terre）〉」と結びつくものであり、フッサールの「〈原方舟（Ur-Arche）〉」に由来する。上記の議論を踏まえ、レ

ヴィナスにおける「存在論の水面上」がメルロ＝ポンティの「大地」との関係から検討された。

最後に、本シンポジウム全体を締めくくるものとして、パリ第一大学教授で現象学研究の大家ジョスラン・ブノワ（Jocelyn BENOIST）氏による発表「現象学の沈黙を破る（Rompre le silence de la phénoménologie）」が行われた。現象学とは感覚的なパロールを現象へと変容させること、つまり何物かの出現を理想として追求してきた。こうした論点では、感覚的なものの存在はそこに現れるとされるものの意味に尽きることになる。それゆえ、現象に声を与えるという企図のもと始まる現象学は、沈黙の価値を高めることに終わる。ブノワ氏は、メルロ＝ポンティ的な「深淵」の議論を再解釈するとともに、レヴィナスの音についての記述を取り上げ、沈黙の問題にどう対抗しているかを検討した。それによって、現象学を超えた（そして対抗する）現実的な感性哲学の可能性が見出されると主張した。

総括セクション（7月12日）

7月12日最終日はシンポジウムの締めくくりとして、聴者としてこのシンポジウムに参加した大学院生、博士号取得者らが各々15分程度の総括を述べた。なかでも、フランスやドイツの大学院にてメルロ＝ポンティ、レヴィナスに関する博士論文を準備する研究者のほか、医者として臨床に携わりながらも大学院にて現象学研究に携わる参加者が複数名いたことは特筆される。日本からは、いずれもメルロ＝ポンティを主な研究対象とする若手研究者の酒井麻衣子、佐野泰之、三宅萌の3名の参加があった。スリジー＝ラ＝サルでのシンポジウムは、このように最終日に若手研究者らに総括を求めるセクションが設けられるが、今回は、コロナ禍がまだ尾を引いており、日仏の往来がそれほど容易ではなく、参加者が限られていたことが悔やまれる。

なお、事前に参加予定だった講演者のなかで、ディディエ・フランク氏、ジャン＝リュック・マリオン氏、マルクス・ガブリエル氏らは諸事情により参加がかなわなかった。いずれも、現象学や近現代哲学において世界的に研究をリードする研究者であるだけに残念であった。

III. 本シンポジウムの意義および課題

本シンポジウムは、以上のように複数の角度から、きわめて多岐にわたる議論が活発に展開された。とはいえ、全体を振り返ると、本シンポジウムがメルロ＝ポンティ研究およびレヴィナス研究においてもちうる意義のほかに、いくらかの課題が浮かび上がってくる。

1) メルロ＝ポンティ研究の側から

研究発表において言及される資料は、メルロ＝ポンティの主著とされる『知覚の現象学』や『シーニュ』、『見えるものと見えないもの』が中心であり、没後半世紀以上経った今日なお彼の著作が様々な研究関心に応えていることが確認された。また講義草稿の出版が進んだ結果、世界的な研究水準においてはすでに、しばしばメルロ＝ポンティに寄せられてきた典型的批判が棄却されていることも確認された。例えば、「知覚の現象学」が「知覚」と「現在」の絶対的優位性を認めるものではないことをメルロ＝ポンティ哲学における「想像的なもの（l'imaginaire）」の解釈から指摘するデュフルク氏や、後期メルロ＝ポンティを特徴づける概念の一つである「肉（chair）」を、自足的に閉じたものとしてではなくむしろ他者への解放性として取り上げ直すサントベール氏が顕著であろう。

またサントベール氏による大規模な草稿研究を中核として、後期哲学への関心は引き続き強まっているようであり、本シンポジウムでの発表でも繰り返し「肉」や「受肉（incarnation）」といった概念への言及があった。「肉」については、前述の通りデュフルク氏による「想像的なもの」やフッサールの空想論からの分析のほか、澤田哲生氏によって、フッサール及びフロイトのナルシシズム論を踏まえた分析も行われた。このように「肉」概念に関して様々な理論的源泉が解明されつつあり、後期メルロ＝ポンティ哲学の基礎研究の着実な進展が認められる。

応用研究に関する特徴的な動向もある。『知覚の現象学』を中心に、知覚論や身体論をめぐっては早くから応用研究段階にあったが、今回特に目についたのは「自然」概念への注目と関心の高さである。

メルロ＝ポンティ哲学における「自然」とは、いわゆる自然科学の対象としての自然と、人間が形成してきた文化を縫合する概念である。本シンポジウムでは、コリーヌ・ペリュション氏やオーギュスタン・ベルク氏、澤田直氏といった、エコロジーや環境人文学、環境現象学といった領域での研究発表で『〈自然〉講義』(1995) からの引用が散見された。他方で、厳密な議論が展開される資料の不足という問題があるとはいえ、「自然」、「〈存在〉」、「肉」といった概念の区分けに研究者による少なからぬ異同が存在していたことも指摘しておきたい。メルロ＝ポンティ哲学の内在研究において体系的にこれら諸概念を位置づけ直すことは、取り組むべき課題として残っている。

最後に、美学については第六番目のテーマの一部として7月11日に設定されていたが、「言語、真理、美学」とはあまりに大枠ではないか。感性学の議論を視座に入れた「感覚的なもの (le sensible)」についての言及はブノワ氏の発表で取り上げられていたとはいえ、美学や表象文化論的視点からの検討が総じて少なかったことは問題化しておきたい。メルロ＝ポンティの没年である1961年以降の美術・社会を取り巻く環境、また作品の媒体の変化は、改めて言及する必要がないほど目まぐるしいものである[3]。

メルロ＝ポンティ哲学における感性学や身体論、ヒューマニズムの強度を限界まで試すための事例は溢れんばかりに存在する。こうした状況に対し、20世紀半ばに逝去したメルロ＝ポンティの理論がどのような視座を与え得るのか。その可能性と限界とを改めて見極め、論じる必要がある。

---

2) レヴィナス研究の側から

レヴィナス研究の側から本シンポジウムの第一の特徴として指摘しうるのは、従来よく論じられてきた、現象学をはじめとする哲学史ないし現代哲学の哲学者らとの関係、存在論、さらに倫理と正義の関係といった問題がやや後景に退き、「環境」、「ケア」、「動物」を含めた「非人間」といった主題が重視されていることだ。

こうした傾向は、ペリュション氏自身が先鞭をつけている新たなレヴィナス解釈の趨勢を反映しているものとも言えるが[4]、それば

かりでなく、レヴィナス研究全般の今日的な傾向を示しているようにも思われる[5]。

レヴィナスと環境そのものを主題にした発表はペリュション氏のものに限られるが、とはいえ、メルロ＝ポンティはもとより、河野氏の発表にあるようなアフォーダンス的な視座、ベルク氏の和辻／ユクスキュルのメゾロジー的な視座、澤田氏の発表にあるサルトル実存主義の影響を受けたゴルツの政治的エコロジーの視座など、近接領域における広い意味での環境／エコロジー現象学の展望がさまざまなかたちで示されたことで、翻ってレヴィナスに対してそうした問いを突きつける機会を得たと言える。

この点では、レヴィナスとケアに焦点を当てた村上氏の発表は貴重であった。日本におけるケアの現象学に関する研究はおもに英語圏の研究をベースにしており、十分にフランスにおけるケアに関する哲学／倫理学研究の蓄積は紹介されていない。会場にはレヴィナス哲学に関心を抱く複数の臨床医や心理カウンセラーも聴者として出席し、質疑応答は非常に盛り上がっていた。レヴィナスはもとより、フランス語圏のケアに関する哲学研究を参照した議論がいっそう本格的になされることが今後の課題だろう。

動物／非人間については、渡名喜およびオンブロージ氏の二つの発表が取り上げた。渡名喜はロボットや人工知能の問題にも触れていたが、基本的に議論は動物性の問題に収斂していった。動物性の問題はデリダをはじめこれまで多く論じられているが、ロボットや人工知能に関わる応用倫理学への接続も今後の課題として残るだろう。とりわけ、フランスではこの方面での哲学・倫理学研究はかなり活発に行われているため、そうした知見を取り入れるかたちでの連携が望まれる。

他方で、本シンポジウムの最大の成果は、レヴィナスとメルロ＝ポンティというフランス現象学のビッグネームといえる二人を主題としたことだろう。いずれに関しても専門的な研究の膨大な蓄積があり、一時期に比べて相互の比較研究の試みは減っているように思われる。とはいえ、草稿研究をはじめ、両者の思想の全体像がいっそう鮮明になってきた現段階で両者をあらためて突き合わせるという作業はきわめて実りのあるものとなろう。この観点では、両者の思想の要点を捉えつつこうした対峙の舞台を設定した合田氏および

ブノワ氏の発表はきわめて重要なものであった。

他方で、レヴィナスに関してはユダヤ思想に関するセクションは設けられず、同様に、ジュディス・バトラー『分かれ道』をはじめ、英語圏でかなり議論をされているような、ポスト植民地主義的な見地からレヴィナスのいわゆる「他者の倫理」を批判的に検討するという視座、さらに「性」「ジェンダー」の観点から両者の思想を検討するという視座もなかったことは悔やまれる。前二者はレヴィナスとメルロ＝ポンティという主題からは設定しにくかったかもしれないが、「性」の問題は、この二人のフランス哲学者が（サルトルと並んで）現象学思想の潮流に本格的に導入した問題であったはずだ。

終わりに

シンポジウム会場となった古城の図書室は、それほど広くはないが、登壇者のうしろも含め、四方の壁にはこれまでのシンポジウムの登壇者のものも含む蔵書が並ぶ本棚が並び、フロアにはゆったり座れるソファや、普段は読書用に使われる椅子が置かれ、落ち着いた雰囲気で議論ができる場だった。ノルマンディ地方はフランス北部にあたり、緯度も高いため曇りがちであるが――スリジー国際文化センターのウェブサイトにも「時折晴れることがあります」と明記されているほどだ――本シンポジウムの開催時は、幸運にも晴天に恵まれていた。

図書館の隣にあるエントランスには、壁にこれまでのシンポジウムの記念写真が並べられている。有名な「ニーチェは今日」のシンポジウムをはじめ、錚々たる顔ぶれの参加者たちが居並ぶなか、若き日の九鬼周造が堂々たる姿で写っていたことは心強いものがあった。それぞれの発表の後には、ここにコーヒーやお茶が用意され、参加者たちは国籍や年齢、性差はもとより、専門家、非専門家を問わず、コーヒーを片手に議論の続きをする。

エントランスのさらに隣には食堂がある。朝食、昼食、夕食とも、全参加者が一堂に会して食事をとる。席次はとくに定められていない。食堂に着いた順に席に座り、ある程度が揃うと配膳され、食事がはじまる。ノルマンディ名物のシードルは、日本の麦茶のように

して常に食卓に用意されていた。大皿で用意された食事を各自がとっては次の人に回してゆく。あとは、その日の講演について、自分の関心分野について、その他諸々について話がはずむ。コロナ禍で忘れられていた、「糧」を通じたコンヴィヴィアリテのあり方を改めて体感することができた。

以上に触れたように、このシンポジウムはいくつかの目立った意義はあるものの、準備や運営は一筋縄ではいかなかった。日数が限られ、しかも一般聴衆を前提に日本側の登壇者にも基本的にフランス語における発表が要求されており、さらに、フランスではほぼ一般的になりつつあるようにこうした国際シンポジウムでも「パリテ」の精神に基づき男女の登壇者数をできるだけ均等にするように配慮されていたのだが、これに十分に応えることは難しかった。また言わずもがなであるが、コロナ禍によるさまざまな状況の不確定さなど、本シンポジウムが実現するにはさまざまな条件をクリアーしなければならかった。とはいえ、さまざまな制約や思わぬアクシデントのなか、こうした日仏共同の国際シンポジウムを実現できたこと自体が一つの成果とも言いうると思われる。コロナ禍によって、オンライン会議の意義が十分に認識されるようになったが、本シンポジウムは、改めて参加者たちがおなじ場に居合わせることの意義を確認させてくれたように思われる。いずれにしても、本シンポジウムで実現した研究交流が、今後の日仏での哲学研究の進展のための一つの契機となることを願う次第である[6]。

注

1　詳細については以下も参照。津田雅之「100年に及ぶポンティニーからスリジーまでの歴史」、『大阪大学世界言語研究センター論集』第7号、2012年；星野太「ポンティニーからスリジーへ——ポンティニーの旬日会とスリジー＝ラ＝サルのコロック」、西山雄二編『人文学と制度』未來社、2013年。

2　その記録は以下である。Jean Greisch et Jacques Rolland (dir.), *L'éthique comme philosophie première. Actes du colloque de Cerisy-la-Salle, 23 août-2 septembre 1986*, Cerf, 1993.

3　「自然」や「言語」に関連して例示すれば、例えば渓谷に向かってチェロを演奏し残響と二重奏を奏でるスー＝メイ・ツェーの「〈エコー（L'Écho）〉」（2003）は、「自然」「人間」「非－人間」の三項関係が一段と複雑化したことを明らかにするだろうし、人工知能による絵画産出は「言語」や「歴史」と「絵画」との関係を——「間接的言語と沈黙の声」（1952）からさらに前進させ——問い直すものと

なるだろう。

4　ペリュションの主著『糧　政治的身体の哲学』（萌書房、2019年）ばかりでなく、そのレヴィナス論である『レヴィナスを理解するために』（明石書店より邦訳が近刊予定）においても、こうした趨勢が示されている。

5　たとえば、杉村靖彦ほか編『個と普遍　レヴィナス哲学の新たな広がり』（法政大学出版局、2022年）は、2019年に日本で開かれたレヴィナスに関する国際シンポジウムの論集だが、ここでも「医療」や「ケア」が主題的なテーマの一つとして取り上げられている。

6　なお、このシンポジウムの記録は2023年にHermann社から公刊の予定である。

Beyond Boundaries: Comparative Civilizations Now 23 (Feb. 2023)
Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University